

令和 元年 6 月 12 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370423

研究課題名(和文)21世紀の視座から見る北アフリカ(チュニジア・アルジェリア)の現代文学状況

研究課題名(英文)Modern and actual literary activities in North African countries (Tunisia and Algeria), survey in the 21st century perspective

研究代表者

青柳 悦子(AOYAGI, Etsuko)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：70195171

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文):変貌しつつある北アフリカの国々と共にチュニジアとアルジェリアに注目して、現代の文学動向を探るとともに、この地域で蓄積されてきた文学・文化から現代世界の人間が新たに学ぶ可能性を提起した。チュニジアの現代作家たち(ベルハージ=ヤヒヤ、マナイ)についての研究、アルジェリア現代文学の始祖フェラウンの価値の再考、忘却されてきた仏領アルジェリアにおける現実の再発見についての研究などをおこない、著書(共著・翻訳書)6点、学術論文7点、学術発表14件のほか国内外での講演などの業績をあげた。またとくに、これまでほとんど紹介されなかったことのないチュニジアのアラビア語表現文学について情報をまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本ではチュニジアの現代文学についてはほとんど知られていない。本課題では独自の文学世界を深めている現代女性作家ベルハージ=ヤヒヤの研究と紹介をおこない、また若手作家にも注目して、類例のない貢献を果たした。アルジェリア作家のフェラウンについての研究では、丹念な読み直しと実証研究によって旧来の見解の修正をおこなうとともに、偏った読みがなされてきた制度的要因にも踏み込み、現代文学研究のあり方そのものへの批判を提起した。仏領アルジェリア表象とカミュ文学の再考を通じて、ポスト=コロニアル研究の限界を越える研究方向を開拓した。

研究成果の概要(英文):Focusing on transforming North African countries, especially Tunisia and Algeria, this project explored contemporary literary trends. At the same time, it pointed out the possibility that people in the modern world can learn anew from the literature and culture accumulated in this area. It developed researches on contemporary Tunisian writers (Belhaj-Yahia, Manai), re-evaluation of works of Feraoun, the founder of modern Algerian literature, and examination of forgotten real life under the French occupation of Algeria. As academic results, it produced 6 books, 7 academic papers, 14 presentations in various academic meetings. In particular, we summarized information on Tunisian Arabic expression literature that has hardly been introduced before.

研究分野：フランス語圏文学

キーワード：フランス語圏文学 北アフリカ マグレブ文学 アルジェリア チュニジア ポルトコロニアル 世界文学 多文化主義

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

2011年1月にいわゆる「ジャスミン革命」(「アラブの春」)が起こり、チュニジアではそれまで続いてきた独裁政権が倒れ、民主的な国づくりへの模索が始まった。アルジェリアでは1990年代から2000年代初頭まで続いた暗黒のテロの時代が終焉し、2010年を迎えるころから徐々に社会の安定が戻ってきた。地中海に面する北アフリカのこの二つ国は、ヨーロッパ文明とアラブ=イスラーム文明の交差点を形成しており、旧宗主国フランスとの(良くも悪くも切り離すことのできない)密接な関係から、現代世界の多文化共存状況を代表する地域であると言える。

日常生活においてフランスやヨーロッパの影響を強く受けつつ伝統社会の側面も有するこれらの地域から生まれてくる現代文学を注視することによって、現在の世界が向き合っている多文化融合社会の諸問題と可能性を考えることができる。また、これらの地域で蓄積されてきた文学や文化を、西欧からのまなざしだけに依拠するのではなく、当事者たちの視点を取り入れて再考することによって、これまでの学術研究の偏りを相対化し、新たな視角を得ることが可能であると考えた。

北アフリカの国々の実情は日本ではあまり知られていない。現地の研究者や作家および文化人と交流を持ち、対話を蓄積することによって、新たな知の構図を生み出すことは、日本にとっても、チュニジアやアルジェリアにとっても、また世界的にも大きな意義を持つ。

### 2. 研究の目的

チュニジアおよびアルジェリアの文学状況をできるだけ幅広く視野におさめるために情報を収集し概観を得る。また、現地での出版・流通の事情、文学教育など、文学をめぐる背景や関連状況についても調査をおこない、現状を把握する。主要な作家を選んで研究を深め、またこの地域が現在の世界的な学術研究のなかで持ちうる重要性を明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 現地調査あるいはチュニジア・アルジェリアの研究者との交流

毎年度1回程度現地へ赴き、調査研究、学術交流、資料収集をおこなう予定であった。しかし、外務省からしばしば中東・北アフリカ地域への渡航に関する注意喚起が出され、現地への渡航を断念しなければならない事態も生じた。その場合は、関連地域への渡航に代えて情報収集をおこない、また現地以外の場所での国際学術交流の推進に努めた。

2014年度：外務省安全情報に基づき、2015年2月に予定していたアルジェリア滞在は急遽断念せざるを得なかったが、その代わりに1週間にわたって、フランス、カーンの「現代出版資料センター」で、ムルド・フェラウンに関するさまざまな貴重な原資料を調査した。

2015年度：2015年8月末から9月初めにかけてカナダの最東部に滞在し、近年急増している当該地域への北アフリカからの移民の現状について調査をおこなった。2015年10月に韓国梨花女子大学で、韓国のアルジェリア文学研究者とジョイント講演会を開催し、東アジアの視点からアルジェリア文学の意義を考究した。チュニジアでおこなわれてきた日本=チュニジア学術シンポジウム(TJASSST、筑波大学等主催)は現地の情勢に鑑み2016年2月に日本で開催することとなった。これに参加し、チュニジアの研究者たちとの学術交流・情報交換をおこなった。

2016年度：2017年3月にプサン(韓国)で開催されたAFOMEDI(Asian Federation of Mediterranean Studies Institutes)の国際シンポジウムに参加し、ギリシア・エジプト・イラン・中国・韓国・日本などからの地中海学を専門とする研究者と学術交流をおこなった。とりわけ、2017年3月末に日本で初めてのアルジェリア文学をテーマとする学術会議(3月25日・26日、東京大学)をマグレブ文学研究会のメンバーとともに主宰し、アルジェリア人5名を含む9名の海外からの研究者・文化人を招聘して、きわめて充実した学術交流をおこなった。

2017年度：2018年2月~3月にアルジェリアに滞在し、現地での調査、文化人との情報交換、アルジェ大学での講演などをおこない、数々の貴重な情報を得た。また、これまでにない人的なネットワークを広げることができた。

2018年度：2018年12月に京都で開催されたAFOMEDIの国際シンポジウムに参加し、内外の地中海学の専門家との学術交流をおこなった。2019年2月にはアルジェリア人研究者ほかを招聘しておこなわれた民族学博物館(大阪府)での国際シンポジウムに参加し、アルジェリア文学・文化をめぐる国際学術交流をおこなった。

#### (2) 文献研究、研究発信

作家、作品、文化状況などについての研究を資料に基づいておこない、学会発表や論文刊行、また翻訳刊行(詳細な解説付き)および論集刊行によって発信した(次項「研究成果」(4)参照)。

### 4. 研究成果

#### (1) シンポジウムの主催

現地の社会情勢が不安定だったために渡航回数は限定されたが、逆にこれまできわめてまれだったアルジェリア人研究者の日本への招聘に携わり、研究内容を進展させるとともに、新たな研究ネットワークの構築に参加できたことはきわめて大きな成果である。とくに日本初のア

ルジェリア文学をめぐるシンポジウムの開催（2017年3月25日・26日、東京大学）は特筆すべきである。本課題の代表者はこのシンポジウムに中心メンバーとして関わり、準備と開催の実現を通して、多くの研究者・文化人との信頼関係を格段に深めることができた。また北アフリカ文学研究の意義を、来場した多くの聴衆を通じて、日本において広く発信することができた。

なお、分担者として関わっている科研基盤（B）「アラブ＝ベルベル文学の比較地域文化的研究体制の構築」（代表者：鶴戸聡、課題番号26300021、平成26-29年度）を通じて、上記のシンポジウムでの人的交流をその後の学会の開催によってさらに展開させることができた。

## (2) 現地調査

当初、年1回を想定していた現地調査は安全配慮の点から断念せざるをえない状況が続いたが、2018年2月から3月にかけてのアルジェリア滞在は大きな収穫をもたらした。

アルジェリア社会の現在の変化に触れ、民主的な考えの国民への浸透、社会インフラの遅れさせながらの整備、娯楽など文化面の活発化のきざし、若年層の意欲的な姿勢、政治的な停滞など、現在のアルジェリアの改善点と問題点を把握することができた。

そのうえで、植民地時代以来の蓄積が現代社会でどのように生かされているか、とくにアルベール・カミュゆかりの場所を実際に訪ね、カミュ文学を現実的な背景のもとに理解し直す基礎情報を得ることができたことはきわめて貴重である。アルジェ市内の住居・リセ・その他作品の舞台となった主な箇所を訪ねただけでなく、『異邦人』で描かれるマランゴ（現ハジュート）を訪ね、作中で母親が入居していた養老院のモデルである大病院内の旧ホスピス（高齢者養護施設）とキリスト教墓地を探し当てたことは、大きな成果である。またカミュの母親の墓が現在もアルジェ市内の元の住居近くのキリスト教徒墓地にあることを訪問して確かめることができた。こうした調査活動は、現地の文化人・在住者の助力があって初めて可能になったことであり、継続的な研究活動から生まれた信頼関係の成果であると言える。

## (3) 資料調査

2015年2月にフランス北西部カーンの「現代出版資料センター」での資料調査では、アルジェリア文学の始祖ムルド・フェラウンに関して新情報を多く得ることができた。同センターにはフェラウンの作品の大半を出版したフランス大手の出版社スイクのアーカイブがあり、フェラウンおよび遺族の手紙、作品の出版をめぐる原稿査読評、作家および編集者による書き込みや加除訂正のある原稿の一部、支払い関係の書類、作品に関する反響（新聞での書評など）、翻案・作品の利用にかかわる文書（学校などでの朗読会や演劇への翻案の許可およびその実施に関する資料）など、多くの貴重な原資料に触れることで、フェラウンの文学がこの出版社の中継によってフランス社会で得ることのできたものの大きさと、特に作品刊行前にフェラウンの作品に対してこの大出版社がかけた圧力やしばしば辛辣な評価を知ることができた。とりわけ遺作小説（『記念日』）の刊行をスイク社が再三にわたり拒絶していた実態を検証することができた。これまで隠蔽されてきたこうした事実を視野に入れることで、作家が何に抗して文筆活動と出版への努力をおこなっていたのか、また当時とその後の文学的評価がどのように偏ったかたちで形成されてきたのかを検討することができた。旧植民地の文学や、文化的周縁地域から出てくる作家の作品の流通や評価について、再検討をおこなう必要性を明示する一つの事例とすることができた。

## (4) 研究発表

学会合での口頭発表や論文執筆を通じて、研究成果を発信した（具体的には次項5を参照）内容的な方向性として主に以下の7点があげられる。

チュニジアの女性作家エムナ・ベルハージ＝ヤヒヤをめぐる研究

チュニス在住のベルハージ＝ヤヒヤは、平板な身辺雑記に終わりがちな他のチュニジア現代小説家たちとは異なり、日常や社会の観察を出発点としながら哲学的な考察や、新たな価値観・認識の枠組みの導入、表現技法の開拓などの点で傑出した作家である。この作家の文学の意義を、作品内容と文体の両面から考察した。また「ジャスミン革命」後のチュニジアの変化とそこにいたるまでのチュニジアの社会史を独自の観点で考察したエッセイ『チュニジア、私の国（へ）の問い』*Tunisie, Questions à mon pays*を検討した。翻訳書として、小説『青の魔法』（*Tasharej*, 2000）を刊行した。またベルハージ＝ヤヒヤを含め、現代チュニジア文学全体の概観をおこなった。

チュニジアの若手作家ヤメン・マナイについての研究

エンジニアとしてフランスの大企業に勤めるマナイは30代の若手作家で、チュニジアの社会の矛盾や移民としての存在の困難を問う多くのチュニジア作家たちの傾向とは異なって、空想性にあふれたポップな書きぶりや、ファンタジーや笑いを通しながらも、チュニジア人であるからこそ目を向けることのできる現代世界の問題を照射する洞察力によって、国内外で高い評価を得ている。マナイの2つの小説、『不確実性の歩み』*La Marche de l'incertitude* (2008)、『イブラヒム・サントスのセレナーデ』*La Sérénade d'Ibrahim Santos* (2011)について分析し、新しい文学傾向の出現に注目した。

アルジェリア現代文学の始祖ムルド・フェラウンの文学の再評価

これまでスイコ版で世界に流通してきた代表作『貧者の息子』(1950年、スイコ社短縮版1954年)について、初版を入手しスイコ版との丹念な比較研究おこない、また初版をもとにした翻訳書を刊行して、他の研究者や読者に供した。カーンでの調査を踏まえ、他の研究作業を加えて、フェラウン文学が現在までどのような偏向を加えられて受容されてきたのか、その実態を考究する研究を行い、日本、韓国、アルジェリアで発表して、大きな反響を得ることができた。とくにアルジェ第二大学文学部での講演(2018年3月7日)では多くの教員と学生たちの前で、自分たちの国の大作家についてただ既存の説を学習し踏襲するのではなく、新たな見直しをおこなう余地と可能性があることを伝えることができ、反響を得た。

フランス植民地時代のアルジェリアについての再検討およびカミュ文学の再考

アルジェリア文学・文化についての偏った見解はこの地がフランスの植民地だったことと大きく関係している。すなわちフランスからの植民地アルジェリアへのまなざしを、偏見に基づいたものや忌避感によるもの、また逆に旧植民地を美化する傾向などを脱した、冷静で均衡のとれたものに変えていく必要がある。この意味で重要な活動を展開しているのが、フランス人バンド・デシネ(フランス語圏の漫画)作家ジャック・フェランデズである。

ジャック・フェランデズによるアルジェリア表象(『オリエント画帖』全10巻、1987-2006年)とカミュ文学の翻案(『客』2009年、『異邦人』2013年、『最初の人間』2017年)およびその他の関係著作を検討することにより、現代における仏領アルジェリアの再表象の意義とその必要性について明らかにした。またフェランデズによるカミュ翻案もの三作を日本語に翻訳して出版し、日本の読者・研究者に新たな展望をもたらす材料を提供した。またフェランデズをめぐる研究に見られるきわめて偏った主張(フェランデズを植民地主義者と決めてかかる立場のもの)の存在を、旧植民地関連の研究の一つの典型的な傾向として分析し、わかりやすいポストコロニアル研究を脱した、より緻密な植民地社会・文化の分析の必要性を明らかにした。

さらに、ともに1913年にアルジェリアで生まれた作家フェランデズとカミュを同時に視野に入れることで、今日だからこそ可能なこの二人の作家の活動の再検討を進めた。とりわけカミュが1939年に記者としておこなったアルジェリアのカピリー地方についての新聞連載記事を、他の報道と比較検討しておこなうことができたのは、フランス国立図書館が当時の新聞をデジタル公開したり、WEB上で複写申し込みを受け付けるようになったおかげである。こうして新たにアクセスが可能になった情報源を生かしながら、21世紀の現在であるからこそないうる北アフリカ研究のあり方を模索した。

チュニジアのアラビア語小説概観

チュニジアでの文学賞のデータをもとに、同国でのアラビア語表現文学の出版状況について情報をまとめた。アラビア語と日本語が堪能な若手研究者の協力を得て1998年から2013年までに出版されたアラビア語による小説について、文学賞授与機構からのコメント・解説と内容紹介をおこなった。

アルジェリアにおけるマンガ制作の現状

若者たちの表現活動として、とりわけアルジェリアでは日本式マンガの制作が近年盛んになっている。この現象に目を向けて、北アフリカの社会変革の機運と関連させながら、現地の人々の新たな創作活動について調査と分析を開始した。

## 5. 主な発表論文等

(計7件)

青柳 悦子、ピエ・ノワールのマンガ作家フェランデズによるアルジェリア表象—『オリエント画帖』に見る複眼的視点、文学研究論集(筑波大学比較理論文学会)、査読有、第37号、2019、pp.1-20

青柳 悦子、アルジェリアの“日本マンガ”、国際シンポジウム「ポップ・テキストの力—日本文化の対話的発展に向けて」報告書、査読無、2019、pp.23-28

青柳 悦子、植民者と身体消去—バンド・デシネ版カミュ原作『最初の人間』をめぐる、『018年度大学重点研究所支援事業第1回国際学術会議「帝国と植民地の身体イメージ」報告書』(東巖大学校在日コリアン研究所)、査読無、2019、pp.39-44

AOYAGI, Etsuko, The War of Memories and Pieds-Noirs Diversity: French Cartoonist Jacques Ferrandez and His Pluralist Vision, *Proceedings of The II. International Conference of the Asian Federation of Mediterranean Studies Institutes*, 査読無, 2018, pp.145-151

青柳 悦子、『貧者の息子』の語り(1)—物語における現在形の多様な効果、文藝言語研究(筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻) 査読有、第71号、2017、pp.1-69  
[https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=40642&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=83](https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=40642&item_no=1&page_id=13&block_id=83)

青柳 悦子、1938-1939年のカピリー報道—カピリー人作家フェラウンの出発点として、文

学研究論集（筑波大学比較理論文学会） 査読有、第 35 号、2017、pp.1-21

[https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=41065&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=83](https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=41065&item_no=1&page_id=13&block_id=83)

AOYAGI, Etsuko, La narration instable et une vision « trans-subjective » dans *L'Étage invisible* d'Emna Belhaj Yahia; un roman tunisien vu selon l'optique japonaise, 外国語教育論集（筑波大学外国語センター、査読有、第 37 号、2015、pp.63-73

〔学会発表〕(計 14 件)

青柳 悦子、アルジェリアの“日本マンガ”——新しい文化的ポリフォニーの誕生、国際シンポジウム「フランス語によるアラブ＝ベルベル文学における多声／多言語性（ポリフォニー）」、2019.2.27、国立民族学博物館（大阪）

青柳 悦子、植民者と身体の消去——バンド・デシネ版カミュ原作『最初の人間』をめぐって、国際学術会議「帝国と植民地の身体イメージ」、2019.2.11、筑波大学（茨城県）

青柳 悦子、アルジェリアの“日本マンガ”公益財団法人中島記念国際交流財団助成事業国際シンポジウム「ポップ・テキストの力——日本文化の対話的発展に向けて」、2019.1.13、東京国際交流館ブラザ平成国際交流会議場（東京都）

AOYAGI, Etsuko, The War of Memories and Pieds-Noirs Diversity: French Cartoonist Jacques Ferrandez and His Pluralist Vision, AFOMED2018(Asian Federation of Mediterranean Studies Institutes) conference, 2018.12.23, University of Kyoto（京都府）

青柳 悦子、バンド・デシネ作家ジャック・フェランデズのアルジェリアものをめぐって——『オリエンタ画帖』を中心に——、マグレブ文学研究会、2018.9.1、筑波大学東京キャンパス（東京都）

AOYAGI, Etsuko, L'Influence des éditeurs sur l'image de Mouloud Feraoun, La Commémoration du 56ème anniversaire de l'assassinat de Mouloud Feraoun, 2018.3.7, Algier (Algeria)

青柳 悦子、フランス人マンガ家ジャック・フェランデズのアルジェリア関連作品について——マンガ版『異邦人』からカミュの問いを問い直す、筑波大学比較・理論文学会、2018.2.17、筑波大学（茨城県）

青柳 悦子、被植民者にとっての公教育と文学 - ムルド・フェラウンの教育小説、国際シンポジウム "Modern Literature and Education"、2017.7.15、筑波大学（茨城県）

AOYAGI, Etsuko, The falsified representation of the Algerian author Mouloud Feraoun; An analysis of its generation process and re-evaluation of his works, AFOMEDI (Asian Federation of Mediterranean Studies Institutes) conference, 2017.3.11, Busan (Korea).

青柳 悦子、チュニジアの現代作家 Yamen Manai の作品について、マグレブ文学研究会、2016.11.26 日、筑波大学東京キャンパス（東京都）

青柳 悦子、『貧者の息子』執筆の背景 - - カビリー報道記事との比較、マグレブ文学研究会、2016.7.23 日、筑波大学東京キャンパス（東京都）

AOYAGI, Etsuko, How Europeans encountered the Arabic world through the Arabian Nights, TJASSST2015 (Tunisia-Japan Symposium on Society, Science & Technology), 2015.2.24, University of Tsukuba (茨城県)

青柳 悦子、アルジェリア文学の始祖ムルド・フェラウンの再発見、梨花女子大学校人文研究院「比較・翻訳フォーラム」、2015.10.30、ソウル（韓国）

青柳 悦子、ムルド・フェラウンの小説・著作出版の経緯に関する研究と調査活動について、マグレブ文学研究会、2015.3.29、筑波大学東京キャンパス（東京都）

〔図書〕(計 6 件)

ジャック・フェランデズ『バンド・デシネ 客』青柳 悦子訳、彩流社、2019、70

ジャック・フェランデズ『バンド・デシネ 最初の人間』青柳 悦子訳、彩流社、2019、190

ジャック・フェランデズ『バンド・デシネ 異邦人』青柳 悦子訳、彩流社、2018、150

ムルド・フェラウン『貧者の息子—カピリーの教師メンラド』青柳 悦子訳、水声社、2016、278

松田幸子・笹山敬輔・姚紅編『異文化理解とパフォーマンス』〔分担執筆青柳 悦子〕、春風社、2016、504 (323-348)

エムナ・ベルハージ・ヤヒヤ『青の魔法』青柳 悦子訳、彩流社、2015、182

〔その他〕

新聞掲載（アルジェリア）

« Un travail fascinant et joyeux » (interview of AOYAGI, Etsuko, by Ameziane Ferhani), *El Watan* (Algerian journal), 2017-3-25, pp.14-15 (Art & Lettres)。新聞掲載インタビュー

## 6 . 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。